冬日偶成（太刀掛呂山）

茅斎　怕れず　雪威の　侵すを
愛す　可し　三冬　誦読の　心
座傍　叢雑たり　書　千巻
日々　炉を　擁して　欣賞すること　深し

茅齋不怕雪威侵　可愛三冬誦讀心
座傍叢雜書千巻　日日擁爐欣賞深

解説　冬の日にふとした思いつきでできた作。

語釈　※偶成＝※茅斎＝茅葺きの書斎。あばら屋の書斎。※雪威＝雪による寒さ。※三冬＝冬の三か月。※誦読＝声を出して読むこと。※座傍＝座った傍。座のまわり。※叢雑＝自家の蔵書，珍書を集めたもの※擁炉＝炉を抱く。炉を抱きかかえる※欣賞＝高く評価する。。

通釈　あばら屋の書斎に忍び込んでくる、雪の寒さも苦にならない。冬の極寒の間は訪れる人も少なく、大声で書を読むことができる。座っているまわりには、雑然と、あちこちに書籍が積み上げられている。毎日炉にかじりつくいて書を鑑賞出来る喜びが一層深まる